

会津の花嫁行列

靖男が記憶を宿した初めは、祖母の引くりヤカーに乗って行商する情景だ。靖男は花を挿したバケツにつかまって、ユラユラと揺れる美しい風景とリヤカーを引く祖母の背中を見て育ったのだ。

その一年後に会津の昔ながらの花嫁行列があったのは今でもはっきり目に焼き付いている。祖母の行商と関係する人達で、結婚式は靖男の実家でしたので良く憶えていた。まだ5歳になるかならぬかの頃だから昭和34年頃だと思う。

靖男の生母は靖男を生んですぐ病気で亡くなった。

まだ機械化しない当時の農家は人手がいる。祖父の強い勧めで父は再婚させられて、間もなく義母との間に2歳違いの弟を生んだ。そして、その祖父も突然脳梗塞で倒れ寝たきりになってしまった。祖母は手の掛かる幼い靖男を義母にたくす遠慮があったのかもしれない。だから、靖男は祖母一人に育てられたようなものだ。

祖母は、賢くて気丈な人だった。働き者でもあったから、そのまま家の長として頑なに家を守り靖男を育てた。またそれが60歳を前にして亡くなる祖父の遺言でもあったようだ。元来花栽培が好きで祖母は、米農家だけでは収入が少ないというので、裏庭に花畑を造って野菜などと一緒にリヤカーで行商することを考えた。その商売もすぐ軌道に乗ると、いつの間にか町場の人達は親しみを込めて「子連れの花屋さん」と呼ぶようになっていた。その呼び名の理由は、幼い靖男がリヤカーに乗っていらぬ手伝いをして何時も傍に居るからだ。祖母と孫の花売りは人気があって繁盛した。

靖男はリヤカーに乗せた切り花や野菜と一緒に小一時間も続く農道を引かれていく。揺れるバケツの花々から覗くのは、青い空に白い雲、そして姉さん被りの祖母の背中だった。遠くに見える山々と近くにそびえ立つ磐梯山に見下ろされ、長閑な田園風景の中を引かれていった。リヤカーを引く祖母は、いつも変わらず木綿緋にモンペ姿だ。でこぼこ道に車をとられながら、ひと押しひと押し、草の茂った畦道をユラユラと進んで行く。祖母の唯一のオシヤレは、桜で染めた姉さん被りの手拭いだった。

「ええ天気じゃなあー、やす坊」

吹き出る汗に歩みを止めると、祖母は一息入れるようにその手ぬぐいを取って靖男を振り返った。そして、満面の笑みで靖男に話しかける。

「やす坊、昼にやー、花江婆とこ行ってラーメン食うべなあー」

「うん、花江婆とこさ、いくべー」

祖母の引くりヤカーは田んぼで草取りする人と出会う度、挨拶がてらに歩みを止めた。

「実り具合は、どうだべやー」

「雨さえありやー、さすけねべ・ハア？ やす坊もキイ婆の手伝いかー」

町場までの道程は季節ごとに色付く田んぼばかりが続いている。会津若松駅と七日町駅の間につだけ踏切があつて、その踏切まで田園風景を遮る物は何もない。ただ、往き道の右手方に村の墓が並んで稲穂に沈むように見えているだけだった。祖母は踏切の登り傾斜の前でようやく一息つく。靖男をリヤカーから下ろしたら、リヤカーの引手にちよこんと座ってキセルで煙草を一服吸う。祖母のお決まりの儀式だ。

「キイ婆、早えなー」

「ああ、横山さん。なんも早えーことねえべさ。盆前にや布石打たねばあ・」

「キイ婆は、いつも準備ええのおー」

横山万屋は、町場から踏切近くのこの場所に移つて来たばかりだ。横山店の裏では既に広大な田んぼが更地になって新しい団地の工事も始まっていた。新市街地になったこの辺一帯は、会津若松駅と七日町駅の裏に位置し、金川町と命名された。横山店の奥さんは新市街地開発にいち早く目を付け移転して、誰よりも先に布石を打ったというわけだ。

横山の奥さんも祖母も働き者だから、変に賢いところで気が合っている。

「団地は、いつ頃できんだべ？」

「来年の秋だどいう話じゃがなあー？」

「んじゃ、それまで辛抱じゃな」

踏切を超えれば田んぼも畑もない、小さな商店や旅籠などが混在する住宅街で軒を並べて道も狭かった。すぐに豆腐屋が見えて、その主人の岸五郎と顔を合わせても、「きじじころう。後で寄るでな」と言つて、祖母は通り過ぎる。

そして、最初に立ち寄るのは三軒隣の『宍堂』という店だ。宍堂の店は、魚、干物、乾物、缶詰、そして、祖母から仕入れる切り花や野菜も売っていた。しかし、店頭販売が主な商売ではなく、旅館や芸者置屋への仕出し販売が主な収入源だった。

主人の宍戸は、戦時中左足を負傷し義足を着けている。40歳過ぎても独身で、足を不自由にしながらも一人コツコツ切り盛りしていた。七日町の料亭を兼ねた芸者置屋が一番の得意先で、その信用からか宍堂商店が忙しくなると、三十路を過ぎた芸者の貴子を店の手伝いにと紹介された。堅気の商売に憧れていた貴子は、女盛りを過ぎてても美人だったし働き者だった。宍戸は御用聞きで忙しく朝と昼時しかいない。店番をするのは貴子だけで、掃除をしたり品物を

並べたり、気の利く応対をして店を盛り上げた。

貴子は子煩悩で、ちよくちよく顔を出す靖男を特別に可愛がった。靖男は『ししどう』と、最初言えずに『ちちど』と呼んでいた。『ちちど』と呼ぶのは、店の名前ではなく、美人の貴子のことだから靖男は長い間勘違いしていたのだ。

祖母は宍戸が出掛ける前には店先に着いて、リヤカーに積んだ木箱も皆ひろげ、あるもの全部見せる。宍戸は指差し品を吟味しては選んでいく。

「この花と、これとー、それ全部・・・こりや初物のトウモロコシじゃな、じゃー、それも全部じゃ」

「茶豆は、いらんのか？・・・それにイー、貴子は？・・・」

「シッ、言わんでなあー・・・茶豆か？んじゃ、それも貰うべ」

「へえ、ありがとなっし」

祖母がそう言うとも何も置かずいつも店仕舞いをする。それは半日ばかりの行商の前に、宍戸に買付予約を入れて置くという賢い祖母が考えた商い方法だった。それから貴子とじゃれて遊んでいる靖男をリヤカーに乗せれば、すぐに城北町から駅前町へと足を延ばすのだ。

「ちちどー、あとでなあ」と、靖男が手を振る。

「キイ婆と一緒に、ええなー、やす坊」貴子も応えて手を振った。

会津若松市は鶴ヶ城を中心として栄えた。城へと続く通りは江戸末期を彷彿とさせて狭く、ジグザグに交差して見通しが効かない。古く戦国時代に考案された防備を主にした城下町なのだ。社会の今もその姿を残すのは、見通しを悪くするばかりでなく、それ以上に車や人の通行を不便にしている。戊辰戦争に負けた影響からか、何かと他の地に比べ開発は遅れてしまったようだ。

駅も商店街の賑わう中心から外れて北の端に造られたので、そこは城北町から駅前町と呼ばれている。ポチポチ会津にも観光の波は来ていたが、来客は駅から降りると、タクシーやバスに乗って鶴ヶ城の城跡や東山温泉地へと出かけてしまう。町は駅前にもかかわらず古い平屋の家が軒を並べてゴミゴミしていたし、大きな建物は国鉄の官舎とバス会社があるだけで特別な賑わいもなかったのだ。

宍戸の店から駅前町は少し遠い。道々20分以上歩くが、何処へも寄らずに祖母が訪ねるのは理由があった。宍戸も祖母も主な商売相手は旅館だから、お互いのテリトリーに立ち寄らない暗黙の了解を果たしているのだ。

平屋の間にポツンとある2階家は、たいてい旅籠のような小さな旅館の建物だった。

祖母は、そうした2階家の旅館前に来ると、

「花いらんかー・豆いらんかー」と、一声上げた。

「キイ婆、こつちやこー」と、白滝旅館の女将さんが呼び止める。

早速、リヤカーを止めると、木箱を下ろして門の前に並べる。

「初寄りか？ありや、やす坊も又一緒けー」

「んだ、今日の初寄りだべ」

「んだ・・」

「この前、アサヅキうまかったなー、今日もあつたら貰うべよ」

「もう、ミヨウガしかねえべ。なあー、やす坊」

「んだ・・」

「あら！もう水茄子できたかや。いい色じゃねー」

旅館の女将とやり取りしていると近所の人達も寄ってくる。祖母は天秤計りで豆や茄子を計っては手早く新聞紙に包んだり、銭入れから釣り銭出したりと忙しくなる。

祖母は忙しい手を休めずに、

「やす坊、おまけはどれじゃ」と、声を掛ける。

靖男はあらかじめ祖母に言われた黒豆をすくって、

「はい、おまけ」と、笑わした。

「やす坊は、いつも気前がいいのー」

「んだ・・」

「いやー、きれいな花菖蒲だこと。8本も貰うか」

「そりゃ困ったなー、頼まれもんじゃやで。マッ、4本くれえならいいべや」

「今日、無尽が2組入ったがね。もう何本か、トウモロコシ貰うべよ」

「頼まれもんじゃやけ、かんべんな。三日もすりゃー、もつと甘くなるべよ。

なあ、そうじゃなあー、やす坊」

「・・そうじゃ」

予約を入れた宍堂のものは見せるだけにして、チャッカリ次回の予約も取って売らずに帰る。昼前に三か所も旅館を廻れば皆売り切れになった。

会津は無尽講を、無尽又は無尽会と呼んで実に盛んだった。

無尽は仲間同士の定例会みたいなもの、決められたお金を持ち寄って集まり、一番資金に困った者から順に積立金を受け取るという制度だ。それは仲間同士の人助けを目的として始まったが、いつの間にか名目の付く酒飲み宴会となった。その宴会所が温泉も湧かない町場の小さな旅館で行われるから、あちらこちらに旅館が点在して『無尽たまわります』と看板に掲げられている。宴

席に芸者が呼ばれることは珍しくもなく、月に一度の散財をして飲めや歌えで楽しんだ。無尽講は小さな地域でも数々あってルールも違う。くじ引きやゲームなどをして積立金を奪い合うようなギャンブルめいた無尽もあった。生活に余裕のある人は一月に何口も入会している者も多くいる。だから、祖母の行商も宍堂の店も、その無尽講で繁盛しているのだ。

「やす坊、花江婆のとこ行って、ラーメンとカキ氷食うべな」

「うん！花江婆とこさ、行くべー」

ラーメン屋の花江は無尽講で評判だった元芸者で、祖母とは5歳年下ではあるが同村生まれのことから花江の若い時からの不幸も良く知っていた。だから、芸者をやめる時や店を開店する時など何かと面倒を見たようだ。祖母はまるで身内のように親しくしていた。

「キイ婆、まだ昼前なのに、もう終わりかえ？」

「ああ、残りは、宍堂の貴子さんに置いてくもんばかりじゃ」

「あらー、やす坊汗びっしより・サツ、こっちやおいで、水風呂浴びましょねー」

会津の夏は盆地特有の蒸し暑さがあった。店の奥はすぐ住まいになっている。小さな風呂桶にチャポンと入れられ花江に優しく体を拭かれると、体だけではない心地良さがあって、靖男は特別な幸せを感じるのであった。花江の話す言葉やしぐさは上方方便も若干混じって、上品な女性のつつましさがあったからかもしれない。

水風呂でさっぱりした後、ラーメンを食べながらカキ氷のできるのを待つ。手廻しのカキ氷の音が涼しさを誘った。

「キイ婆、貴子さんは、まだ芸者勤めをしているの？」

「んだなー、断りきれねえと、本人は言ってるがの」

「宍戸さんは、何も言わないのかしら」

「商売以外は、無口じゃけ・・・」

「貴子さんも好いてるみたいだし、一緒になったらいいのにねー」

「貴子は特別美人じゃけんな。断られると思っで、言えんのじゃろ・偏屈の会津っぽでよー、仕方ねえべ」

花江と祖母は猪苗代湖近くの村で生まれた。

村祭りの夜に酒を飲んで湖に泳ぎ出し溺れる者があった。花江の父はすぐ助けに出てその犠牲者となってしまった。それが女盛りを前にして会津の芸者に売られる花江の不幸の初めになった。花江が18歳になると、名のある軍人に囲われて世間も何も知らないままに京都や大阪に連れられていった。慣れない土地を転々と住まいを替えながら肩身の狭い中で長く住んだ。しかし、その人

も戦争で亡くなってしまえば、関西の地に居場所も頼れる人もいない。又、会津の芸者置屋を頼って戻るしかなかったのだ。

キイとは19年ぶりで再会した。そして花江のそんな苦労話も、小さい頃から知るキイ以外に話す相手は誰もいなかった。

花江が芸者置屋で貴子と知り合ったのは、会津へ帰ったばかりの頃で貴子はまだ14歳だった。貴子も花江の境遇とよく似ていたし、自分と同じ不幸をせぬようにと貴子を娘か妹のように見守っているのだろう。キイが自分にしてくれたように何でも相談に乗って面倒を見た。貴子も花江の心遣いを知っているし、花江とキイの親しい間柄も何か重いものを感じ取っていた。

「やす坊。ちちどに、花江婆が待ってるよ、言っっちゃうだい」

「うん。花江婆待ってる」

靖男が花江と別れる時は、割烹着に顔うずめて匂いを嗅いだ。それは靖男の大好きな、上品な花江の匂いだった。

幼い時期、夏の思い出の中に花江婆の水風呂と割烹着が強くあるのは何故だろうと、今も不思議に思っている。

祖母は宍堂に戻って買付予約の他に売れ残った物も一緒に置いて行く。子煩悩の貴子を知っているから、ついでに靖男も預けて行った。

「やす坊、きじごろう豆腐にいるからな」

「キイ婆、やす坊は、後で送っていくでな」

貴子は嬉しそうに言っつて、靖男を抱きかかえた。

「やす坊、何して遊ぶ？」

「花江婆、待ってる」

「花江婆じゃねえべ、花江姐さんだよ。やす坊は花江姐さんが好きだべ？」

「うん」

「ちちどと、どっちやが好きだ？」

「花江婆、一等。ちちど、一等」

祖母の行商を知る人は、皆『やす坊』と声を掛けて人気があった。でも、花江と貴子は特別だった。靖男の生母が若くして亡くなった事も、自分等の不運な身の上のことも、それぞれどこか共通して語れない哀愁がある。その想いから出る女の優しさは、他の人達にはない慈愛を靖男に投げ掛けるのだ。靖男も幼いながら身を持ってそれを感じていた。

豆腐屋の岸五郎は靖男の分家の五男で、早くから丁稚に行つて豆腐作りをおぼえ独立した。祖父は真面目で勤勉な岸五郎を買っていたので独立する際には

資金の援助もしてやった。祖母も、正直な岸五郎の人間性をその豆腐の味と同様に好んでいる。

豆腐屋は祖母の行商と同じで、朝は早いけど昼過ぎには仕事も落ち着くから、祖母は行商が済むと茶飲み仲間として長居をするのが常だった。

「おめ達、仲人したことねえべ・今度してみつか？」

「いきなり、何言うべ、キイ婆」

茶桶を持ったまま、妻の由紀子が驚いて言った。

「きじごろうも、いっぱしの人間になったべ。仲人の一つや二つ、やったら箔も付くべや。どうじゃ、きじごろう」

「まーた、そげなこと言っつて、おどかすなよー・んでも、誰のさ？」

「おめ様達の、知ってる人に決まっつてんべな」

「えー、誰の？」

「ほらーッ・近くにいんべよ。頭にシーが、付く」

「シー？・ユキ、おめ、知っつつか？」

「シー？シーねえー、知らねえなー」

祖母は、宍戸と貴子のことだと打ち明けて、まだ日取りも式場も何も決まっつていないが、仲人だけは早目に決めて準備しなければ何も進まない。と説明し、どう考えても、その仲人は二人を良く知る岸五郎達だとも言った。

「エーッ、ほんとかよ、宍戸にやー何も聞いてねえぞ」

「おらも、貴子さんからは、何にも聞いてねえだ」

「まあーだ内緒だべ。その内あいきつに来るべき。なんせ仲人様じゃけなッ、それまでは知らぬ振りしてろじゃ、いいな！」

岸五郎も由紀子もまったく気付かなかったと驚いているが、仲人になるのはまんざらでもなさそう。由紀子は明るくお喋りだ。『内緒』と言えば余計に話したくなるだろうと、祖母は内心ほくそ笑んでいる。

「へえー、貴子さんが・宍戸さんに・フーン」

「・キイ婆、そんで、仲人っつて、何すればいいんだべ？」

「何すればっつて・おめえ、そんなことも知らねえか？」

「ユキ、おめ、知っつつか？」

「おら達の仲人は、キイ婆だもな・おら緊張してだから、なーんも憶えていねだ」

「まんず、挨拶だべ・見合いじゃねべ？まあ、恋愛みたいなもんじゃから、馴れ初めなんか語るわなー」

「ユキ、馴れ初め、知っつつか？」

「なーんも・」

「まーだ、まだ時間あつからよー、ボチボチ調べればいいべ・あつ、それと、どこが気に入ったかだ。つまり、宍戸は貴子のどんなどこさ惚れたかー？とか、貴子もそうじゃ。それに店をやる覚悟はできてるかー？とか、ナッ」

「おら達、そんなこと知らねべ。なあーユキ」

「んー・キイ婆に言われてみつと、そうかもしんねな。仲悪いわけでもねーし・」

「そんなことも知らねえで、仲人できつかね・ちゃんと調べねば。だけんど面と向かつて聞くのはダメだぞ。こつそり聞いて、挨拶文にまとめるのが仲人ちゅーもんじゃ・あーッ、それとな・芸者になった不幸な話が一番だめじゃ。仲人は、二人のいいとこばっか褒めねばなんねえだ、祝い事じゃけな。とにかく、目出度いことを調べて報告するのが仲人なんじゃ・そのぐれー、わかっぺよ」

「なんだつて、難しもんじやのー」

一人息子の正人が、中学に入ったばかりの学校から帰ってきて、祖母を見つけて挨拶をした。

「よう、来らんしたー・あれつ、キイ婆、やす坊は？」

正人は靖男が来ると良く遊んでくれる。兄弟がいなから靖男が可愛くてしかたないのだ。靖男も正人と遊ぶのが好きだから、金魚の糞のように付いてまわる。

「宍堂の貴子さんと、遊んじよるがー」

「そうか。んじや、父ちゃん、小遣いくれる」

「帰つて来るなり小遣いじゃもなー・何すんじや、アホたれ」

「やす坊に花火見して、遊ぶべ」

祖母は、銭入れから小遣い出して正人に渡した。

「こげな明るいに花火もねえべ。ホレ、正人。今日は稼いだから、キイ婆がやるべな。きじごろう、ついでに豆腐2丁と油揚げ10枚貰うべ」

「あんや、小遣いまで貰つて申し訳ねえなー」

正人は、すぐ横山商店に走って花火を買つて、靖男も貴子も宍堂から連れて来た。

貴子は豆腐を入れる桶を持って、

「正人君が、花火を見に来いと言うから、今日はいつちもよりちよつと早いけど、ついでに豆腐貰いに来ました」と、頭を下げて挨拶した。

「あつ、あー・よう、来らんした」

由紀子は仲人の話のすぐ後だから、貴子をマジツと見て慌てた様子だ。縁側から上がるように座布団もすすめたが、貴子は遠慮して、縁台に靖男を膝に乗

せて座った。

「マサ兄ちゃ、花火」

靖男がそう言うと、正人は花火を見せるのに縁台に皆出るようにうるさく、何度も言った。

「よう、見てるよ。これは明るい時にやる、新作花火じゃー」

「マサ兄ちゃ、それ何？」靖男は嬉しそうに言った。

「まあ、見りゃ、わかるがな。まんず、一つやってみんべ」

おはじきのような黒い欠片を縁台のすぐ近くに置いて、正人はマッチで火を付けようとした。

「こら、正人。危ねえべ、もう少し離れてやれや」

「この花火は、危なくねえだ。ホレッ！」

花火は、シューシュー音と煙を出して、ニヨロニヨロ、モコモコと蛇のように伸び出した。そのクネクネ出てくる様子が面白いのか、靖男は貴子の膝に乗って手を叩いて喜んでゐる。パンと弾けるでもなく確かに安全な花火だった。

「どうじゃ、おもしろー花火だべ？」

正人は得意になって次から次と火を付けて、自分が一番楽しそうにしている。

由紀子は花火が終わる頃、水羊羹を切って茶桶に出して来た。また花火をやると蚊が寄ってくると言って、蚊取り線香を縁台下に置いて火を点けた。

すると、祖母は突然、

「貴子さんは、今、幾つになるべ？」と、貴子に聞いた。

「今年の秋で、34歳になりますだ」

「そうけ、まだ若けなー。子煩悩じゃけ、自分の子供も欲しいべなー。まだまだ子供も生めんべよ」

貴子は少し頬を染めてうつむいた。返す言葉を失ったその横顔には無垢な美しさがあつた。岸五郎夫婦は目を合わせた後、貴子とキイ婆を交互に見合つた。気まずい沈黙がしばらく続いた。

「あれ？・・やす坊が寝ちまつただ」

靖男は蚊取り線香の匂いを嗅ぐと眠くなるのだ。貴子の膝の上でそのまま寝入ってしまった。

由紀子のお喋りは間もなく始まり、宍戸も貴子も知らぬ間に、七日町、城北町と、キイ婆の予想以上に広まっていった。

それが花江の耳にも入っていたから、貴子呼んで聞いてみた。

「そんなことー・・花江姐さんは、誰に聞いただ？宍戸さんには、何も言われていねえよ・・言われたら、花江姐さんに相談するべなあ？」

「でも、仲人は岸五郎さんと、決まったと聞いているしねー」

「えっ、仲人がきじごろうさんなの？・・・」

「だって由紀子さん本人が言っているみたいよ。ただの噂でもないど皆話しているわ」

いつの間にか、貴子は店で接客する度『おめでとさん』と、声掛けられるのが当たり前のようになっていた。また、置屋の女将さんからは好まない席なら座敷に出なくてもいいと言われるし、宍戸は宍戸で、得意先を廻るたび『うまくやったなー』と言われて冷やかされるし、式場はうちの旅館を使って欲しいとお願いされる。

次第に宍戸と貴子が目を合わせるのにも、変な遠慮が生まれて会話も減っていった。

それからひと時が過ぎて、春が来ると『子連れ花屋』は又忙しくなった。

「やす坊、花江婆のところさ行くべか」

「うん、花江婆さ行く」

花江も朗報があつて、キイ婆が来るのを今日か明日かと待っていた。

「キイ婆、お疲れさまー。あらら、やす坊もお疲れねー・・・」

「なんだべ、浮かれた顔して」

「宍戸さんがねッ、ようやく一緒になろうって話したみたいよ」

「今ごろ、なんだべ。じれってえー男じゃのー」

「きつと、置屋の女将さんに叱られたのよー。女将さんも、式はいっただいっだつて心配していたもの・・・でもね。貴子さん、籍は入れるけど結婚式はあげないと言うの・・・」

貴子は置屋の借金はとうに完済しているが、弟と母親への仕送りはつい先頃まで続いていたから蓄えは幾らほどもない。会津の結婚式は花嫁道具ばかりか、宴会式場にもそれなりにひと財産を費やしてしまう。二人とも遅い結婚だし、お祝いされるものでもないからと言いに来たのだ。それに、宍戸さんにも余計なお金を使ってもらいたくないと貴子自身が氣遣ったのだ。

花江は貴子の家の事情も、つましい心遣いも良く知っている。

「・・・でもね、キイ婆、私の姉を憶えている。父が亡くなる前に姉は結婚したわ。とても綺麗な花嫁姿だった・・・私も憧れたけど、仕方ないわね・・・貴子さんはもつと綺麗よ。だから私、できるだけのことをしてあげたいの・・・それが私の夢なのかもしれないわ」

花江は家の奥から大きな硯を持って来てキイ婆に渡した。それは戦死した花江の旦那から、お金に困ったら売ればいいと渡された物だと言った。古端溪と

いう中国でもめつたに出ない珍しい硯だという。その価値がわかる処に出せばかなりの額になると教わったが、花江は何処に売ればいいのか、その価値も何もわからないと言った。

「・頼めるのはキイ婆しかいないわ。幾らかにでもなったら、置屋の女将さんに渡して欲しいの」

「んー・・そうじゃ！書道の天川先生に見てもらうべ。うちの遠い親戚じゃから、良く見てもらえんべよ・・そうじゃなー、やす坊」

「うん、そうじゃ」

宍戸と貴子の結婚式は、靖男の家の座敷ですることになった。祖母は、式場に得意先の旅館を使うのはお金も掛かるし、何かと面倒があるだろうと気を遣ったのだ。

雪深い地方の農家は皆屋根が急傾斜だから、天井が高く柱も太い。靖男の家も百年以上経つ歴史ある屋敷で、大きな大黒柱と曲がった梁を使った寒冷地特有の古民家だった。座敷は江戸間で十二畳もあって広い。宍戸と貴子は親戚も少ないし、懇意にしている人達だけです。から十分な広さだった。

結婚式の朝は小雨がぱらついていた。

芸者置屋では貴子が花嫁衣裳を整えるのに花江がその手伝いをした。貴子の結婚を一番に喜んだのは花江だから、花嫁衣裳も着付けも化粧も何もかも、皆、花江が用意したのだ。そして、最後の化粧を整えて貴子の肩に手を置くと、貴子の潤んでいた目から涙が零れ落ちて止まらなくなった。花江はその化粧直しをしながら、

「あら、あら、涙で化粧が台無しよ。キイ婆に、叱られるわ」そう言って、角隠しをする前に、

「こんなに綺麗な花嫁さんを見るのは、私、初めてよ・・・ほら、泣かないで自分をごらんなさい」

そう言いながら、花江も鏡に映る貴子の姿を見ては目頭を押さえた。

「花江姐さん。ほんに、今までありがとなっし・・・」

村に一頭だけ残っていた馬に小さな馬車仕立てをして、仲人の岸五郎夫婦が貴子を迎えに来た。花江が花嫁姿の貴子の手を取って馬車の後ろに置いた床机に座らせると、馬車脇に控えていた手伝いの人達が祝いの長持唄を吟じ始めた。馬車は唄に合わせるようにゆるゆる進んでいく。そして、近所の見送る人に祝饅頭を配りながら進むと、

『貴子さん、きれいだよ』と、あちらこちらで声が掛かった。

美人で評判の貴子だから、それを少しでも知る人達は貴子の花嫁姿を一目拝もうと、朝仕事もそこそこに集まって来ていたのだ。

踏切と横山商店を過ぎた頃、小雨も具合良く止んで、磐梯山に掛かった白い雲も吹き上がるように消えていった。広がる田んぼの稲穂には小さく白い花が咲いているのが見える。雲がちぎれて青空が所々に顔を出すと、霞みが取れた山々も遠くまではつきり見えてくる。村の入り口にも大勢の村人達が行列を作って待っているのが見えた。又祝饅頭を配りながら長持唄が威勢よく響き渡った。その歌声は、山裾まで続く田んぼを抜けて青味掛かった山並に吸い込まれるように消えていく。瑞々しい盆地の風景に溶け込むような、素朴で美しい会津の花嫁行列だった。

靖男もその行列の中に居て、真っ白な角隠しの中を覗いたら憂いを帯びた貴子の目と目が合った。会津の風景とならんで、美しい花嫁姿の『ちちど』と、涙して微笑む花江と、そして祖母の満面の笑顔は、今も靖男の目に鮮やかに焼き付いて離れない。

完